



Title	Kazuo Ishiguro研究：創作の原理としての〈日本〉と〈イギリス〉
Author(s)	莊中, 孝之
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49383
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【30】

氏 名	しょう なか たか ゆき 莊 中 孝 之
博士の専攻分野の名称	博 士（文 学）
学 位 記 番 号	第 2 2 6 1 1 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学 位 論 文 名	Kazuo Ishiguro 研究－創作の原理としての〈日本〉と〈イギリス〉－
論 文 審 査 委 員	（主査） 教 授 出原 隆俊 （副査） 教 授 北村 卓 教 授 服部 典之

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、カズオ・イシグロがこれまでに発表した全長編小説六作品と、いくつかの短編小説を、〈日本〉と〈イギリス〉を参照軸に考察するものである。

第 1 章では、これらイシグロの作品や作家自身が日本で受容されていくさまを、日本で公表された文献を可能な限り多く参照し紹介した。

第 2 章では、イシグロは原爆を描くことで一定の注目と評価を獲得し、さらに自己の「日

本性」を前面に出すことで、作家としての自分自身のイメージを確立させていったと考察する。彼が長崎生まれの日本人という自己の経歴を最大限に生かしたとする。

第 3 章では、彼が小津の映画などだけではなく、川端の『山の音』といった日本文学作品を具体的に参照したのではないかということを検証した。

第 4 章では、その省略の多い迂言的な英語で表現された想像の日本語が、その英語をさらに日本語に変換したとき、日本人の評者は違和感を示したと述べた。

第 5 章では、イシグロが日本生まれの作家というそれまでの自己のイメージを払拭すべく、そうした要素をすべて排したはずの長編第 3 作においても、その文体や主人公の倫理観などに「日本的なもの」が見られることを、明らかにした。

第 6 章では、自己の「日本性」と「イギリス性」のどちらでもないヨーロッパの特定不可能な街を舞台に展開した長編第 4 作でもやはりイシグロの祖国日本での記憶や、イギリスに渡ってから生活が色濃く反映されていることを示した。

第 7 章では、イシグロの作品に見られる母性憧憬を、長編第 5 作を中心に探った。

第 8 章においては、イシグロの最初期の短編“A Family Supper”を、川端の『山の音』最終章と対比させながら、彼の日本表象を分析した。西洋における日本のイメージを巧みに操りながら、それを裏切っていくとするイシグロの戦略を明らかにした。

第 9 章ではイシグロの長編第 6 作が持つ性質を、フロイトの「不気味なもの」やベンヤミンの「複製技術時代の芸術作品」といった論考を参照することで考察した。

結論として、イシグロは、「日本」と「イギリス」の間を揺れ動きながら、双方に対する愛着を抱きつつも、そのどちらでもない立場から両者を相対化しているとし、それが特定の価値観だけを支持しないという作品の倫理観とも結びついていると指摘した。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

内外の先行研究を網羅した上で、カズオ・イシグロの作品を日本において全面的に考察しようとし、日本人としての歴史認識、イギリス人としての歴史認識、侵入してきたアメリカへの意識、日本とイギリスがぶつかった上海でのふれあいの可能性、「作り物」としての、つまり「コピー」でしかない「自分」としての意識、等々、興味深い話題が取り上げられている。また、川端康成や谷崎潤一郎たちとの比較文学的考察など、新たな知見を提示したことは高く評価される。カズオ・イシグロに関して日本語で書かれたまとまった書物は現段階で出版されていないことから、本論文の意義は明らかである。

イシグロの原爆表象の考察、及びイシグロのインタビュー等での発言を巡る曖昧さを問題にし、それがアラキ・ヤスサダという名前で出版された Atomic Ghost という詩と比較され、この詩の「責任と罪をめぐるより困難な疑問」を回避する狡猾さが、イシグロの原爆投下の責任主体を巡る糾弾と自己弁護という太平洋戦争における重大な道徳的問題から免

責されるレトリックに通じるものであることを議論する章など、チャレンジングな姿勢も注目されよう。

一方で、各論文から一つの構築物となったときに、拡散しすぎている章や、最終章など、その参照軸にいささかのズレが生じている箇所もあり、統一性が必ずしも十分であるとは言えない。

また、「我々読者」という語り方が散見するが、多様な読者が存在するはずで、読者を一元的に捉えてよいのかという疑問も生じる。母性憧憬を論じた部分などは、谷崎研究などでも繰り返し試みられるアプローチと大差がなく新鮮味に乏しい。

さらに、著者自身が反省するところだが、伝記的事実や作家自身の言葉に頼りすぎている面があることは否定しきれない。

『日の名残り』においては、イギリス貴族のカントリー・ハウスは戦後の現在アメリカ人オーナーに乗っ取られているが、イシグロ作品における、アメリカへの意識（乗っ取るアメリカと収奪される祖国）は分析するに値する問題であり、今後の課題と言えよう。

求めるところも多いが、論者の問題意識は随所に見られ、今後の論者、さらには日本でのイシグロ研究へ大きな一石を投じた意欲作であると評価し、本論文を博士(文学)の学位を得るに値するものであると判断する。